目　次

第43回人権啓発詩・読書感想文

　　　　　　　募集・表彰事業について··········2

詩　の　部　門

小学校（小学部）低学年の部

ぼくのじいちゃん··············································4

小学校（小学部）高学年の部

私なりの人権······················································6

大丈夫·································································8

大事なこと························································10

ものさし····························································12

好き···································································14

言い方で変わる心の葉っぱ······························16

ことだま····························································18

笑顔をもらった私·············································20

ずっと忘れない·················································22

幸せだから笑う·················································24

見方を変えると·················································26

差別がなくなったらいい··································28

じんけん····························································30

人権って何？·····················································32

ありがとう························································34

全部できなくても·············································36

子どもの権利····················································38

中学校（中学部）の部

人間のいいところ·············································40

差別···································································42

読書感想文の部門

小学校（小学部）低学年の部

ペンギン····························································44

小学校（小学部）高学年の部

子どもの権利ってなぁに··································46

「焼き肉を食べる前に。」··································48

中学校（中学部）の部

「手で見るぼくの世界は」を読んで················50

桃太郎と鬼························································52

人生の「色」······················································54

ぜんぶ自分の自由·············································56

声······································································58

「ないものねだり」の世界は··························60

人からの評価····················································62

講　評·······························································64

第43回人権啓発詩・読書感想文　募集・表彰事業について

　一人でも多くの方に人権について身近に考えていただくため、人権の尊さ

やお互いの人権を守ること、差別のない明るい社会を築くことの大切さや平

和の尊さを訴えることなどをテーマに、人権啓発詩・読書感想文を、府内在

住・在学の小・中学（部）生から募集しました。

○主催

　　大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会（愛ネット大阪）

○募集期間

　　令和６年７月１日（月）～８月30日（金）

○応募、審査

　　 詩部門・読書感想文部門合わせて1,052作品の応募があり、審査会におい

て30作品を入選としました。

詩部門

小学校（小学部）低学年の部

阪南市立西鳥取小学校 ３年

小学校（小学部）高学年の部

大阪市立みどり小学校 ５年

大阪市立関目東小学校 ６年

寝屋川市立宇谷小学校 ６年

寝屋川市立神田小学校 ６年

寝屋川市立石津小学校 ６年

寝屋川市立第五小学校 ６年

寝屋川市立第五小学校 ６年

寝屋川市立第五小学校 ６年

寝屋川市立第五小学校 ６年

寝屋川市立第五小学校 ６年

寝屋川市立望が丘小学校 ６年

寝屋川市立木田小学校 ６年

東大阪市立英田南小学校 ６年

東大阪市立英田南小学校 ６年

東大阪市立英田南小学校 ６年

泉南市立新家東小学校 ５年

泉南市立東小学校 ５年

中学校（中学部）の部

交野市立第四中学校 ２年

泉南市立泉南中学校 １年

読書感想文部門

小学校（小学部）低学年の部

阪南市立上荘小学校 ２年

小学校（小学部）高学年の部

泉南市立雄信小学校 ４年

阪南市立桃の木台小学校 ５年

中学校（中学部）の部

堺市立津久野中学校 １年

堺市立津久野中学校 ２年

堺市立津久野中学校 ３年

交野市立第四中学校 ２年

交野市立第二中学校 ３年

交野市立第二中学校 ３年

阪南市立鳥取中学校 ３年

○表彰式

　　令和７年１月26日（日）　ピースおおさか（大阪国際平和センター）

詩の部門

小学校（小学部）低学年の部

ぼくのじいちゃん

阪南市立西鳥取小学校　三年　池田　優馬

ぼくのじいちゃんの車の色はピンク色だ

ピンクの車で

ぼくをいろんな所へつれて行ってくれる

ある時

じいちゃんの車を見てわらう人がいた

なにがおかしいんだろう

なんでわらうんだろう

みんなそれぞれ

すきな色があっていいじゃないか

ピンク色のじいちゃんの車

かわいくて

かっこよくて

ぼくは大すきだ。

小学校（小学部）高学年の部

私なりの人権

大阪市立みどり小学校　五年　服部　紗知

自分らしさってなんだろうか。

男らしく、女らしく、なんてことを聞いたりするけれど、わからないな。

自由な世の中って言われるけれど、

自分が自由なのか、わからないな。

日本は昔、戦争をしていて、

食べる物も、

住むところも、

着る服も、

考え方や、発言だって、

自由ではなかったんだって。

今は、もうずっと戦争はしていなくて、

毎日、平和にくらしている。

好きなことをさがすことができて、

たぶん、自分らしさについて考えることも、

できる。

ああ、これってきっと、

自由なんだろうな。

自分らしさってなんだろうか。

あいかわらず私にはよくわからないけれど、

それってきっと、

自由が当たり前であってこそなんだ。

今の自由をかみしめて、

当たり前の自由に、甘えないようにしなくちゃな。

自分が良ければ、それでいいわけじゃないことだけは、少しわかったかもしれないな。

人に優しくできるようになれば、

自分らしさも見つかるかもしれないな。

大丈夫

大阪市立関目東小学校　六年　稲葉　友優

大丈夫だよ

言ったことを忘れても

私が

もう一度言ってあげるから

大丈夫だよ

覚えてないって言ったって

私が

一緒に考えてあげるから

大丈夫だよ

私のことを忘れても

私が

絶対覚えているからね

私が

絶対忘れないからね

だって

じいじの心は私をきっと覚えてるって

信じてるから

大事なこと

寝屋川市立宇谷小学校　六年　吉村　望結莉

わらいながら言った言葉も

ＳＮＳではつめたくひかる

そんなつもりじゃなかったって

言いわけなんかはつうじない

だいじなことは目をみて言おう

まちがえたなら目をみて謝ろう

ＳＮＳでつたえやすい時代だからこそ

その声に笑顔にかちがある

ものさし

寝屋川市立神田小学校　六年　小林　恒河

ものさしは長さをはかる

でもその長さはものだけじゃない

人の長所、短所をはかるものさしもある

そのものさしは人によって

はかれる長さがちがう

自分の長所か短所か見るとき

過去の自分の長さと比べる

なのに、なのに

比べなくていい他の人のものさしと

比べさせられる

はかれる長さがちがうものさしなのに

好き

寝屋川市立石津小学校　六年　田中　詩

私は自分の好きが好き

自分にしかない考え

自分にしか出せない答え

私はキミの好きも好き

キミにしかない考え

キミにしか出せない答え

私は自分の好きを

好きって思える人が好き

誰かに否定されたって

自分を無理やり変えないで大丈夫

私は自分を好きでいたい

言い方で変わる心の葉っぱ

寝屋川市立第五小学校　六年　市川　千尋

軽い気持ちで言った言葉

受けとる人の気持ちはいろいろだね

うれしく感じた人

いやな気持ちになった人

かなしい気持ちになった人

その一言でいやな気持ちにさせてしまっても

あやまったって取り消せない

自分に正直でありたいけど

思ったままの言葉を言うのは少し違う

言葉をもっと深く知ったら

私の心の葉っぱはもっと増えるだろう

ことだま

寝屋川市立第五小学校　六年　小倉　早穂

だれかが言った

つめたいことば

私のこころは重く、重く、暗くなる

私に言われたわけではないのに

だれかが言った

あたたかいことば

私のこころは軽く、軽く、明るくなる

私に言われたわけではないのに

ことばはきっと、なにかをかえる

小さくても、少しでもなにかがかわる

だれかが明るくなれる

光るほうへ輝くほうへと進める

そんなことばを私はつかいたい

笑顔をもらった私

寝屋川市立第五小学校　六年　吉中　明日美

私はダンスが好きだ

おどっていると楽しくなる

ある日言葉のちがう男の子が来た

「こわい」「伝わるか」と思った

そんな中一緒におどると男の子は

言葉がちがう場所、人の中

でもとても笑顔で楽しそうにおどっていた

次の日　また同じ男の子がいた

男の子と目が合ったとき男の子は笑顔で手をふってくれた

いつの間にか私も笑顔になっていた

ずっと忘れない

寝屋川市立第五小学校　六年　松下　寿也

いいよ

何曜日か忘れても

ぼくが

教えてあげるからね

いいよ

おこっても

きっと

不安なんだろうね

いいよ

ぼくのこと忘れても

ぼくはおじいちゃんのこと

ずっと

忘れないからね

幸せだから笑う

寝屋川市立第五小学校　六年　上垣内　彩羽

私は笑った

心から笑った

いっしょに笑った友達も楽しそうだった

もちろん私も楽しかった

私は笑えなかった

心はおこっていた

友達は笑っていた

楽しそうだった

私はそれに腹が立った

目の前に苦しんでいる人がいるのに

助けずに笑っていたから

私は助けた

それを見て友達は去っていった

「笑う」ってすてきなものなのに

なんでそれをうばうのだろう

見方を変えると

寝屋川市立望が丘小学校　六年　小島　望愛

見方を変えると

毎日が楽しい

さわがしい人は

周りを明るくしてくれる

静かな人は

落ちついている

マイペースな人は

自分を大切にできている

せっかちな人は

決断が早い

見方を変えると

短所が長所に

見方を変えると

その人の良さが見えてくる

見方を変えると

毎日が楽しい

差別がなくなったらいい

寝屋川市立木田小学校　六年　岡田　彩巴

私は男の子みたいな

格好をしている

髪の毛も短い

私はこの格好が好きだ

学校の帰りに

知らない人から

「あなた男の子みたいな格好して

はずかしくないの」

と言われた

私はこのとき

差別がなくなったらいいと思った

じんけん

東大阪市立英田南小学校　六年　髙倉　彩希

「じんけん」それは

誰でも作ることができる

好きな色を選べること

好きなことができること

遊びたい人と遊べること

誰もが幸せに生きられること

このようなこと　全てじんけん

「じんけん」それは

誰でも壊すことができる

女子だからスカート

男子だからズボン

女子と男子は遊んじゃダメ

女子はピンク　男子は青

このようなこと　じんけん？

絶対に「じんけん」じゃない

じんけんは誰でも作ることができて

誰でも壊すことができる

そして誰でも守ることができる

「そんなん言う必要ある？」

この一言でその子の人生が変わるかもしれない

勇気を出せばその子が救われるかもしれない

一人一人勇気を出して言ってみよう

人権って何？

東大阪市立英田南小学校　六年　森本　悠暉

人権って何？

人権はみんなのプライバシーを守ってくれるもの

人権って何？

人権はみんなが平等にチャレンジできるもの

人権って何？

人権は「自分らしく」が通用するもの

少しでも「バカ」や「しね」と言ってしまうと

人権侵害になってしまう

「知らなかった」は通用しない

みんなの支えになっている人権

そのルールを破るとみんなのバランスが崩れてしまう

このバランスを保つには一人ひとりの意識が必要

だからあなた一人が意識すれば

みんなの人権を守ることができる

少しでも悪口を言っていない？

これまでの自分を振り返ってみよう

ありがとう

東大阪市立英田南小学校　六年　西田　悠琉

そのたった一言で

みんなが幸せになる言葉

ありがとう

そのたった一言で

心の込め方で伝わり方も変わる言葉

ありがとう

そのたった一言で

誰かの生きる燃料となる言葉

ありがとう

ありがとう

みんなが幸せになり

心を込めて言い

誰かの生きる燃料となる言葉

ありがとう

全部できなくても

泉南市立新家東小学校　五年　直江　潤

ぼくには苦手なことがたくさんある

大きな音が怖い

手が汚れるから書写や図工がきらい

不器用だからリコーダーが苦手

それでも投げ出さずにがんばっている

そして、クラスの仲間はそんなぼくを助けてくれたり、はげましてくれる

みんな、みてて

いつか得意な数字を使って、すごいことしてやるんだ

全部かんぺきにできなくても、ぼくは大丈夫

そして次はぼくが周りを助けるんだ

今のクラスのみんなみたいに

子どもの権利

泉南市立東小学校　五年　鈴木　彼方

子どもの権利

自分のわがままを通すためのもの？

自分だけ気持ちよくなるためのもの？

いや、違う

子どもの権利は

みんなが笑顔になるためのもの

私はこれを

大切にしたい

中学校（中学部）の部

人間のいいところ

交野市立第四中学校　二年　源　千遥

人間のいいところって

なんだと思いますか

障がいのある人

性別を決めたくない人

肌や髪や目の色が違う人

たくさんの人がいるこの世界

そんな世界の中に、

「普通」なんて言葉はありません

あってはならないのです

自分と少し違うから、

あの人ちょっと変なんだ

というあなたの自己判定

もうやめませんか

みんな違っていて当たり前

違うからこそ人間

そんな考えがあふれる世界が

一番かがやくのです

最後にもう一度聞きます

人間のいいところって

なんだと思いますか

差別

泉南市立泉南中学校　一年　西光　優樹菜

そこに差別をしている人がいる

あなたは止められる？

差別は人間が作ったもの

だから人間の力で止められる

差別をする人がいれば

必ず差別をされる人がいる

その人が傷つき、命を失うことだってある

そこに差別をしている人がいる

あなたは止めようとする

なぜなら

こわくて差別を止められないよりも

人の命の方が大切だからだ

読書感想文の部門

小学校（小学部）低学年の部

ペンギン

阪南市立上荘小学校　二年　川北　美波

　わたしは、よくピンクは女の子の色、青は男の子の色

といっていました。そうすると、ママは男の子女の子、の色

はないよっていわれました。よくわかりませんでした。

　そんなとき、ママから「この本をよんでみたら？」って

言われて、この本をよみました。

　この本のしゅじんこうはペンギンです。男の子と女の子

がカップルになります。しかし、一組だけ男の子と男の子

がすきになりカップルになります。ほかのカップルみたい

に子どもをそだてたくて石をあたためますが、子どもが

できません。そのすがたをみたしいくいんさんが、だれも

そだてていないたまごを石とかえてあげました。そうす

ると、たまごから子どもができました。そのこどもをたい

せつにそだてたというはなしでした。そしてこのはなしは

本当にあったはなしです。

　まずおどろきました。パパとママは男の子と女の子でし

かないとおもっていたからです。男の子と男の子でも、

カップルになれるし、かぞくです。男の子、女の子っていう

ことが大切ではないと思いました。そうではなくて、おた

がいをすきになるきもちがたいせつです。

　この本をよむまでは、女の子は、男の子は、っていうこ

とがたいせつだと思っていましたが、あまりたいせつでは

ありません。それぞれのきもちがたいせつなんだなってこ

の本をよんで思いました。

　そして、石をほんとうのたまごにかえてくれたしいく

いんさんが、とてもやさしいと思いました。

　わたしも、男の子、女の子にこだわるのではなくて、一

人ひとりのきもちをたいせつにできる人になりたいと思

いました。

「タンタンタンゴはパパふたり」

文　ジャスティン・リチャードソン、ピーター・パーネル

絵　ヘンリー・コール

ポット出版

小学校（小学部）高学年の部

子どもの権利ってなぁに

泉南市立雄信小学校　四年　今野　彩心

　わたしは「子どもの権利ってなあに」という本を読み

ました。この本を選んだ理由は、子どもの権利について

知りたかったからです。

　この本は、世界中の子ども達が主人公の絵本です。子

どもは、大人に守られるそんざいです。権利という言葉

は、とてもむずかしいけどこの本はとてもかんたんに分

かりやすく説明してくれます。

　たとえば、雨がふっても悲しい事がおきても大きくて

しっかりしたかさにみんな守られる権利がある、という所

です。

　一つ一つの文章が分かりやすいのでイメージもしやすいで

す。

　他にも、平和について知る権利もあります。

　私がこの本を読んで一番心にのこったところは、こども

には大事にされる権利があるというところです。私は、こ

の部分を読んでどんなはだの色でも、小さくても大きく

ても、全員大事にされる命なんだとあらためて感じまし

た。

　私は、この本から戦争から守られる権利や親とひきは

なされない権利も知りました。

　私が今こうして家族や友達と楽しくすごしたり、学

校に通えるのは、子どもの権利が守られているからだと

思います。でも、ニュースでは、まだ戦争をしている国を

見ます。私が他の国にうまれていたら、戦争やミサイルに

まきこまれていたかもしれません。そう考えたらとても

こわくなりました。それに、家族とはなればなれになるか

もしれないし、ひどい場合一人ぼっちになるかもしれませ

ん。

　私の住む泉南市には、「子どもの権利に関する条例」

があって十一月二十日は泉南市子どもの権利の日です。こ

のことについて私は考えた事があまりなかったけど、この

本を読んでからすてきな事だと気づきました。これから

私は、自分の権利も大事にして、友達やまわりの人の権

利も大事にしていきたいです。

「子どもの権利ってなあに？」

文　アラン・セールほか

解放出版社

「焼き肉を食べる前に。」

阪南市立桃の木台小学校　五年　植田　孝太郎

　僕は焼き肉が好きだ。なにかがん張ったときのごほう

びに焼き肉に連れていってもらう。お母さんが「焼き肉好

きやったらこれ読んでみ。」と言ってくれたので読んでみ

た。

　この本は、絵本作家の作者が牛の肉やぶたの肉を「屠

畜」する八人の人たちにインタビューしている。

　この本の中で僕が印象に残ったのは、南港市場で働く

Ｋさんのお話だ。Ｋさんは、入社するまでは食肉市場で

働くという職業を知らなかった。最初に見学したときは、

血が大量に出ているし、ものすごいところに来たなと圧

倒された。でも作業している人が牛に向かって、血まみれ

になりながら、真剣に仕事をしているのを見てこれは気

持ちが悪いとかそんなこと言っている場所ではないと思っ

たそうだ。牛やぶたを切ってさばいていく仕事は、きれい

に処理しないと牛を飼ってた人や枝肉を買いに来た人に

迷惑がかかってしまう。Ｋさんは少しでもうまくなるよ

うに負けずぎらいな性格で一生懸命先ぱいのやり方を学

んだそうだ。僕が衝撃的だったのは、Ｋさんが自分のお

腹をさしてしまったという部分だ。僕は牛やぶたをかん

単に処理できると思っていたけど、大怪我につながる危

険と恐怖のとなり合わせの仕事なんだと驚いた。

　この本を最後まで読んで僕はあることに気付いた。そ

れはどの人も自分の職業をまわりの人たちに言っていな

いことだ。どの人も自分の仕事にほこりを持って働いてい

ることがすごく伝わってきた。でも昔から命にたずさわ

る仕事をしている人たちは差別の目で見られてきた。だ

から目次にならんでいる名前にはイニシャルで紹介されて

いる人たちもいるんだと思った。

　僕はどうして食肉産業で働いている人たちが差別され

なければならないのか分からない。みんなふだん牛肉と

ぶた肉も食べている。野菜を作っている農家さんや魚を

とっている漁師さんが差別されているとは聞いたことが

ない。ちゃんと知ろうとしない、ちゃんと理解しようとし

ないことが問題だと思う。

　僕はこの本を読んで、今度から焼き肉がもっと美味し

く感じると思う。たくさんの人のおかげで美味しく食べ

られる。感謝して食べようと思う。明日焼き肉に連れて

いってもらおうかな。

「焼き肉を食べる前に。‥絵本作家がお肉の職人たちを訪ねた」

聞き手・絵　中川　洋典

解放出版社

中学校（中学部）の部

「手で見るぼくの世界は」を読んで

堺市立津久野中学校　一年　小西　希美

　私が選んだ本は、「手で見るぼくの世界は」です。この

本は、視覚支援に通うふたりの主人公がそれぞれの目標

に向かっていく物語です。その物語を通して、視覚障がい

者と晴眼者の関わり方を考えるきっかけをくれる本です。

　私は、目が見えないというだけで悪口を言われてしま

い、外を歩くことが怖くなってしまった双葉に会いにいく

という目標のために苦手だった白杖の訓練に挑戦しはじ

めるという佑の生き方と、家の外に出ることができなく

なってしまった双葉が、

「もう一度、自由に外を歩きたい。それに、佑くんの声が

ききたい。」

という思いで、「伴歩・伴走クラブ」に通いはじめる双葉

の生き方がとても心に残りました。

　なぜなら、「双葉のために」や「佑くんのために」と大

切な人のために何か新しいことをスタートさせることは、

とてもすてきなことだと思ったからです。私は、あまり自

分から新しいことを始めようとしないと思います。一学期

の初めのころに決めた委員会では、自分の中で、学級代

表になってみたいという気持ちが少しだけありました。

でも、私は自分が集会などで前に立って発表できるかと

考えたら、自分の中で不安が勝ってしまい、私は学級代

表には、立候補できずに終わってしまいました。私は、大

切な人のためにという理由ではなく、自分のためという

理由でもいいからとにかく何事にも挑戦していくことが一

番大切だと感じました。自分の中にある不安という感情

のせいで新しいことを始めるきっかけを失い、後悔するこ

とは、もったいないことだと思うので、自分が少しでも挑

戦してみたいなと思うことはどんどん挑戦していきたい

と思いました。

　私は、この本を読んで、晴眼者と視覚障がい者の関わ

り方を考えさせられました。私は、視覚障がいのある人

と出会った経験が少なかったので、視覚障がいのある人

が感じる困難や苦労をほとんど知りませんでした。例え

ば、歩行する時に、点字ブロックのない道や音が鳴らない

信号機があったら、歩行することが難しくなってしまう

ということがあります。また、公共交通機関を利用する

時に、バスや電車の行き先・切符の行き先・値段などが

分かりづらく、交通機関が利用しづらいということもあ

ります。視覚障がいのある人が少しでも快適に過ごすに

は、晴眼者と視覚障がいのある人が協力することが大切

だと学びました。例えば、点字ブロックの上で話している

人や自転車などの障害物があったら、通ることが困難に

なるので、点字ブロックの上で話さない、自転車などの障

害物置かないや自分が点字ブロックの上に物を置いてい

る人を見かけたら、声をかけて注意してあげるというこ

とが視覚障がいのある人が快適に過ごすことができるた

めに私たちができる一番簡単なことだと感じました。しか

し、視覚障がいの知識がないのにいきなり自分にできる

ことを探しても、分からないし、難しいので、まずは視覚

障がいのある人の生活や基本的な情報から学んでいくこ

とから始めていくことが大事だと思いました。視覚障が

いのある人のなかでも、生まれつき視覚障がいがある人、

病気やけがなどがきっかけで目が見えなくなってしまっ

た人、少しだけものを見ることができる人、光も感じな

い人、光を少し感じる人、見える範囲の狭い人など色々

なタイプがあり、それぞれ生活の仕方が少しずつ変わっ

てくることを知りました。このような情報を少しでも

知っていることで、少しずつ自分にできることが見えてく

ると思います。

　この本で、視覚障がいのある人と晴眼者の関わり方を

学ぶことができました。これから先私も視覚障がいのあ

る人と出会うことがあるかもしれません。そのために少

しずつ視覚障がいについて理解していこうと思いました。

今回学んだ点字ブロックの上で立ち止まったり、障害物

を置いたりしないなど、自分に出来ることからはじめて

いきたいです。そして、困っている人を一人でも多く助けて

いこうと思いました。

「手で見るぼくの世界は」

作　樫崎　茜

くもん出版

桃太郎と鬼

堺市立津久野中学校　二年　山口　珠

　「桃太郎」と聞くと、あなたはどんなイメージがあり

ますか。昔話の「桃太郎」は、桃から生まれた桃太郎が、

悪さをする鬼たちを退治して、鬼が盗んだお宝を持って

帰る、というハッピーエンドで、いわば桃太郎は、人々に

とってのヒーローのような存在として描かれていました。

しかし、芥川龍之介の描く桃太郎は、横暴で身勝手で、

ヒーローとは程遠い存在として表現されています。

　芥川龍之介の「桃太郎」は、桃から生まれた桃太郎が

鬼退治に行く、というストーリーは同じなのですが、いく

つもの違いがあります。働きに行くのが面倒だから鬼退

治に行ったり、犬たちにあげた団子は半分だけだったり、

桃太郎の狡猾さが垣間見えるような違いが多いのです

が、一番の違いは、桃太郎は悪、鬼達は善として描かれて

いるところです。

　話の中での鬼は、平和を愛していて、人間を襲ったり

もせず、むしろ人間を恐れて生きていました。それに対

し桃太郎は、働きたくないから、なんて理由で鬼ヶ島に

行き鬼達を虐殺し、投降した生き残りの鬼に鬼退治の

理由を聞かれた時は、「鬼を退治したいと思ったから」と

わけが分からないことを言っており、桃太郎は侵略者か

のような表現がされています。そしてこの悪行により、鬼

の暮らしは一変。桃太郎への復讐に燃え、人間に悪さをす

るようになりました。桃太郎の屋形に火をつけたり、桃

太郎の寝首をかこうとしたり、昔のように平和を愛すこ

ともなくなってしまいました。

　ここからは私の想像ですが、この後いくら桃太郎が鬼

退治に行こうと、鬼が桃太郎を殺そうとしても、鬼と人

間との争いは絶えることはないのではないかと思います。

それは、鬼も人間も互いに「自分は被害者」という考え

方があるからです。確かに、先に攻撃をしてきたのは人間

（桃太郎）で、しかけてきたのはそっち、自分達は被害者

と鬼側は思うかもしれません。しかしそれで仕返し、と

手を出してしまうと、人間側も自分達は被害者と思い、

「仕返し」の仕返し、すると鬼側も「仕返しの仕返し」

の仕返し、のようにいつか先に手を出した方がどっちかな

んてわからなくなり、互いに「これは復讐、自分達は悪く

ない」と考えてしまうでしょう。

　この関係をなくし、平和に生きるためには、互いに、

「自分も加害者」と考えることが大切だと思います。相

手がしてきたことと同じようなことを自分達もしてきた

んだということを自覚し、同じ立場で話し合いなどをす

ることで平和的に解決することができるはずです。

　これは、昔日本がしていた戦争も、同じことが言える

のではないでしょうか。まず本作は、戦争を風刺している

と言われており「鬼だから殺された」と肩書きだけで差

別を受けた鬼達も、過去の朝鮮人、中国人虐殺と共通

しています。日本は「敗戦」という形で終戦しましたが、

別のやり方があったんじゃないかと思います。互いに復讐

し合ってもキリがありません。対等な立場で話し合いが

できていれば、犠牲ももっと少ない時に終戦できたのでは

ないでしょうか。

　戦争ほどスケールの大きいものは、私が介入できるも

のではありませんが、日常のケンカなどでこの考えは使

えるのではないでしょうか。「自分も悪いけどあなたも悪

い、このケンカはなしにしよう」と仲直りすることができ

ると思います。

　桃太郎がしたことは、絶対に許されることではありま

せん。しかし、鬼のしたことも許されることではありませ

ん。人間も鬼も、被害者であり、加害者でもあるのです。

あんなに平和だった鬼ヶ島の豹変、立て続けに起こる人

間達への不幸、この全てが昔に起き、今も続いているとこ

ろがあるのです。私たちに今できることは、戦争を忘れな

いこと、日本も戦争をして、被害を受けたこと、またど

こかに被害を受けさせたことを忘れないことだと考えま

す。

「芥川龍之介の桃太郎」

著　芥川　龍之介

画　寺門　孝之

河出書房新社

人生の「色」

堺市立津久野中学校　三年　重本　美侑

　「おめでとうございます、抽選に当たりました！」

　天使は、一度死んでしまった魂である主人公にそう告

げた。主人公は「小林真」という自殺してしまった少年

の体に入りこみ、再び人間として生きながら自分の生き

方について深く考え直していく。

　私はこの本を読んで、人との関わり方について考えさ

せられた。主人公は初め、自分のことも周りの人々のこ

とも表面だけで判断して軽く見ていた。しかし真として

周りの人々と関わっていくうちに、彼らが表には見えない

それぞれの悩み、苦しみを持っていたことを知っていく。

例えば真の母親は一見明るく前向きな人に思えるが、内

面を深く知っていく中で、実際は自分の平凡さについて

思い悩んでいたのだと気付く。私も、他人の表面的な部

分だけで判断してしまわずに、その人が抱えている本当

の気持ちに対して目を向けることは大切だと感じた。さ

らに母親だけではなく真の父親や兄もそれぞれの問題を

抱えており、真自身もそんな家族についてや学校での人

間関係について悩んでいた。このような家庭の問題を見

て、家族とは一緒にいるだけでなく、お互いを理解して支

え合っていかなければいけないのだと考えた。

　また、私は題名の「カラフル」について、人生は様々な

ものとの関わり、様々な「色」で成り立っているという意

味に感じた。主人公は真としての生活を通じて、自分が

今までどれだけ他人を傷つけて自分自身さえも見失って

いたのかを思い出し、過去の自分の生き方を後悔する。

私もそんな主人公の思いを読んで、過去の自分の行動に

ついて振り返った。私にも失敗や後悔はたくさんある。し

かし、それをどう乗り越えて、どう変わっていくのかが重

要だ。主人公は周りの人々の「色」を尊重し、自分自身の

「色」も取り戻し、そして人生の「色」を見つけていく。

その過程から、それぞれの価値観や生き方を尊重する大

切さを学んだ。私も周りの人々の「色」を尊重すること

はもちろん、自分自身の「色」を大切にしていきたいと

思った。また、これは現代社会においてますます重要とな

る多様性を受け入れるということにもつながる。自分と

他人との違いは、悪いことでも直すべきことでもなくそ

の人自身の個性であり、むしろ誇るべきことだ。「十人十

色」という言葉があるように、人にはそれぞれその人に

しかない「色」がある。それらと人生の中で関わっていく

ことで新たな視点に気づき、物事の視野は広がる。人生

は彩りを増していく。だから私は、それぞれの個性につい

て積極的に向き合っていきたいと思った。自分とは違う

「色」を持った人の立場に立って、理解するとともに、そ

れを柔軟に受け入れる。それは人と関わっていく中です

ごく大切なのだと、この物語を通じて気付くことができ

た。一人一人の独自の色を大切にすることで、私たちはもっ

と豊かな人生を送ることができるのではないかと思う。

私もこれから自分の好きなことや得意なことを見つけて、

それを大切にしながら生きていきたい。

　「カラフル」の物語を読んだことは、自分の生き方や

周りの人々との関わり方について見つめ直すきっかけと

なった。人生の意味についても深く考えさせられた。死ん

だ主人公の魂が少年の体に入りこむというのは非日常

的なことだが、主人公が真としての人生を通して経験し

た出来事や思いは、同じ中学三年生である私たちの日

常生活に通じる部分も多く、家族や友人に対する感情

の揺れ動きには何度も共感した。この物語を読んで、私

は他人に優しく接し、相手の内面を理解しようと努力

することの大切さを学んだ。さらに、自分自身ももっと

大切にしていかなければならないということにも気付い

た。これからも、自分自身が持つ「色」を見つけながら、

周りの人々の「色」も尊重して生きていきたい。そうする

ことで、お互いの人生はさらに良いものとなると思う。人

間とは、人生とは、まさに「カラフル」なのだ。

「カラフル」

著　森　絵都

画　カシワイ

文藝春秋

ぜんぶ自分の自由

交野市立第四中学校　二年　久保　夏希

　私は学校でスカートをはいています。休日はスカート

もズボンもどっちもはきます。

　私が最近読んだ本に出てくる笹森くんも学校でス

カートをはいています。休日もスカートをはくかどうか

は検討中だそうです。みなさんは笹森くんがスカートを

はく理由はなんだと思いますか。「ＬＧＢＴＱ＋だか

ら。」「女の子になりたいから。」色々思いうかぶと思いま

すが、正解は、「はいてみたかったから。」です。そんなも

のかと思ったでしょう。そんなものなんです。もちろんス

カートをはいている人の中には「女の子になりたい。」と

思っている人もいます。ですが、勝手な解釈や中途半端

な理解はその人を傷つける原因となるのです。私がズボ

ンをはいていることに大した理由なんてないのに、「男の

子になりたいんだよね。」「わかるよ。」なんて言われたら、

少しイラッとします。笹森くんのクラスメイトにもそん

な子がいました。正義感が人一倍強くて「私が理解して

あげなきゃ。」と思っている子が。その子は悪くありませ

ん。その子の強い正義感が人を救うこともあるでしょう。

でも、それが必要ない人にそんなことをしてもお互いむ

くわれない結果になってしまうだけです。まずは本人に

聞いてみること、ドストレートに聞くのは良くないかもし

れませんが勝手に決めつけるよりましだと思います。

　女の子がズボンをはくのはわりと日常化していますが、

男の子がスカートをはくのは、まだ少し違和感がありま

す。でも、夏とか暑くないですか。スカートってすごく涼

しいんですよ。気をつけなければいけないことも多いけど、

メンズ用のかっこいいスカートのブランドも増えています。

私がズボンをはく理由がないのと同じで、男の子が理由

がなくてもスカートをはいてもいいんです。夏の暑さにう

んざりしたとき、色々いやになったとき、気分を変えてみ

たくなったとき。キッカケも理由もスカートをはくかどう

かも、全部自由であなたが決めていいんです。私は久し

ぶりにスカートをはこうと思います。あなたは明日何を

着ますか？

「笹森くんのスカート」

著　神戸　遙真

講談社

声

交野市立第二中学校　三年　脇田　優希

　アンさんのようになりたい、そう思った。深い海の底で、

長い間誰にも届かなかった、五十二ヘルツのクジラの声。

その声を聞いたアンさんは私にとってヒーローだった。

　「五十二ヘルツのクジラ」は世界で一番孤独な生き物と

言われているそうだ。ほとんどのクジラが十五～二十五ヘ

ルツ程度でコミュニケーションをとるのに対し、このクジラ

の声は五十二ヘルツ。どんなに大きな声で叫んだとして

も、その声が仲間に伝わることはない。

　主人公の貴瑚がまさにそうだった。両親から想像する

だけで心苦しくなる虐待を受け、いつも来客用のトイレ

にとじこめられていた。「家族に愛されたかった」という

悲痛な思いをトイレの小窓の向こうへ流していた。

　正直私には、その辛さは分からない。私にとって両親は、

どんなことがあっても温かく受け止めてくれるかけがえ

のない存在だ。両親にすら届かない自分の声が他の誰か

になんて届く訳がない。私が貴瑚でもきっと同じことを

思っただろう。

　長い間誰にも届かなかった貴瑚の声はアンさんに届い

た。心身共に限界に達し、ぼんやりと街を歩いていた貴

瑚は高校からの友人、美晴と再会。アンさんは美晴の会

社の先輩で、たまたまその場にいただけ。なのに誰より

も親身になって貴瑚の声を聞き、いつも貴瑚が欲しかった

言葉をくれた。私はそんなアンさんに対する憧れと同時

に、なぜ家族にすら届かなかった貴瑚の五十二ヘルツの声

を初対面のアンさんが受け取ることができたのだろうと

疑問を感じた。貴瑚自身はアンさんの神様みたいな優し

さで救われたと思っていた。しかし、「優しさ」でそこま

で他人に尽くし、親身になって声を聞くことができるの

だろうか。

　クジラは自分のコミュニケーションの範囲内の仲間の声

しか聞くことができないそうだ。貴瑚の五十二ヘルツの

声を聞いたアンさん。そのアンさんもまた、孤独な五十二

ヘルツのクジラで、仲間に自分の声がいつか届くと信じて

鳴き続けていたのではないのか…。この予想が外れてほし

いと思った。優しくてかっこいいアンさんに孤独な気持ち

がある訳がない、そう思っていた。

　「アンさんね、トランスジェンダーだったんだ。」

美晴が言った。アンさんは女性だったが心は男性だった。

しかしそれを誰にも言うことができず、遂には自死。ア

ンさんの五十二ヘルツの声は誰にも届かなかった。貴瑚は、

どうして自分の声を聞いてくれた人の声をもっと聞こう

としなかったのだろう、と後悔した。

　私は貴瑚のこの言葉を聞いて、はっとした。私の声を聞

いてくれる人は家族、友人などたくさんいる。しかし私

はその人たちの声を聞くことができているだろうか。今

まで特に考えたこともないことを、この本を読んでから

意識するようになった。

　インターネットで五十二ヘルツのクジラの声を聞いた。

最初、とても聞こえづらかったので音量をＭＡＸにし、更

にスマートフォンを耳に近づけるとかすかに高い声が聞こ

えた。広い海の中で、どれだけ近くに仲間がいたとして

も、どれだけ大きな声で叫んでも届かない。それなのにこ

のクジラは鳴き続けている。広い海の中で、いつか、誰か

にきっとこの声が届くと信じて。

　この本を読み、五十二ヘルツのクジラの声を聞いて私が

大切だと感じたことが一つだけある。それは、五十二ヘル

ツの声が聞こえなかったとしても、聞こうとすることであ

る。今も世界中には、たくさんの五十二ヘルツのクジラた

ちがいる。誰かに声が届くことを信じて鳴き続けている。

社会全体がその声を聞こうとする姿勢になることで、救

われるクジラたちがいるのだと思う。子どもへの虐待や

ジェンダーなど、たくさんの問題がある今だからこそ、

「聞こうとする姿勢」が大切だと思う。世界から五十二

ヘルツのクジラがいなくなるその日まで。

「52ヘルツのクジラたち」

著　町田　そのこ

中央公論新社

「ないものねだり」の世界は

交野市立第二中学校　三年　田口　璃桜

　「普通と特別」とは、ずっと対義語だと思っていた。あ

の子は何でも出来て、友達もたくさんいて、あの子ばか

り愛される世界は、ないものねだりだと分かっているのに、

手に入れたくて、どうしようもない。けれど「本当に、そ

う思うのか。」と問われてしまうと、何も言えなくなって

しまう。そんなとき、家の本棚にあった一冊の本を手に取

り、読み始めたことで、私は「普通と特別が共存できる

世界」と出会い、遥か遠くにあるものを求めてもがく私

の心が満たされる時間を、私は見つけた。影子は全てに

おいて平凡で自分を永遠の脇役だと思っている高校二年

生だ。そんな影子と同じクラスの普段は世間を賑わすア

イドルである真昼が「特別と普通」が共存できる世界を

見つけるまでの降り注ぐ光を集めたような日々が描かれ

ている。私は、幼い頃から本を読むことが好きで、ミステ

リー、エッセイ、記録文学などを読んできたが、こんなに

も話に引き込まれて夢中になってしまったのは初めてで、

読む前の私と読んだ後の私の心情や世界観は変わった。

それは、きっと読んできた本が面白くなかったということ

ではなく登場人物たちが繰り広げる悩みに世界観が同

じだったからこそだろう。大事なものは大事にしないと、

失ってしまうかもしれないという不安や恐怖、持って生ま

れなかったものに焦がれ、何とか手に入れたいと願う心

に、二人を見守るというよりは、導かれるような、感覚に

されてしまった。二人のお互いを思いあう世界に、全ての

「普通」は、大勢の脇役で影に生きる人なのだろうか。全

ての「特別」は、世界の中心で輝く光に生きる人なのだ

ろうか。どちらも唯一無二で、人としての個性であって、光

と影であり、よいところと、悪いところでもあると思う。

人生や考え方も表裏一体であり、どっちも認めたいし認め

て欲しいという純粋な願いに共感し、気づかないまま、

心地よい「ないものねだりの世界」に落ちてしまっていた。

　私は、真昼のように、普通に憧れるという気持ちが分

からない。だからこそ、特別なんてなれない、光の当たら

ない場所で影として生きる脇役なんだと諦めている影子

の考えに共感していた。けれど、少し前からは、私の人生

にとっては、間違いなく、私が主人公であり、お母さんや、

お父さん、妹にとってはたぶん私はなくてはならない人物

で、立場を変えても変わらず一緒なんだと感じている。こ

の小説の中にある「影というと暗いイメージかもしれな

いが、光を際立たせるためには、絶対になくてはならない

ものだろう。」という考えは、「普通」と「特別」、「影」と

「光」が正反対のようで同じだと感じられた。ないものね

だりの世界は、自分にはない何かをもっている、その人に

とっての「欲しいもの」を羨むだけで、その立場だからこ

その痛みなんて気づかないか、気づかないように目をそら

してしまう。そのことに気がついた上で得られないものに

惹かれあっていく人たちこその関係がいいなと思う。ど

うしても、ないものねだりをしてしまい、落ちこみ、羨ん

でしまうこともあるけれど、一度立ち止まり考えてみる。

ずっとずっと誰かにとって欲しいと思っているものが目の

前にあり、当たり前のようにあって、何てこともない日々

を生きていると思うと心が、軽くなる。それを大事に抱

きしめて生きていきたい。

　自分という存在と、自分を取り巻く世界から逃げ出

したくなると思っていた影子が、真昼との出会いで、「普

通」の、でも「特別」な愛情をもらってたものを、今度は

真昼にあげたいと思っている姿があることが、私にはうれ

しかった。「普通」と「特別」が「光」と「影」に支えられ、

惹かれあっている人たちに、お互いが気づいてこそ、初め

て成り立つのではないかと、やはり思う。「光」である人と

「影」である人がもっているものを受け入れて受け止める

のと同時に、自分のもっている「普通であり特別」な「も

の」を大事にしたいと思う。

　また、恐らく影子と真昼は本当の友達になっているの

だろう。お互いにとっての孤独な日々に光を与えあう存

在と出会い、時に失敗や困難を乗りこえてきたのだから。

二人は、互いを思いやりながら愛しあっている情が存在

している。生い立ちや環境が全く似ていないけれど「ない

ものねだりの世界」を通じて過ごしてきた関係だから。

　ないものねだりをしているのに、本当にそう思うのか

と問われると言葉が出なくなってしまっていた私が、この

瞬間に出会えたことは奇跡だ。一人一人自分を軸としてい

るから「普通」を一概に定義することはできないというの

が世の中の結論なんだろう。ないものねだりばかりして

いたが、これからは自分と向きあっていきたい。「ないも

のねだりの私から、ないものねだりの君へ。」

「ないものねだりの君に光の花束を」

著　汐見　夏衛

KADOKAWA

人からの評価

阪南市立鳥取中学校　三年　東條　智佳

　私は、「ただ、それだけでよかったんです」という本を

読んだ。この本は、とある中学校で男子生徒がいじめに

よって自殺したところから始まる。その男子生徒が残し

た遺書には「菅原拓は悪魔です」と書かれていた。自殺

した生徒のほかに、三人の生徒、合計四人を目撃者なし

でいじめていたという。話は、真相を知るために動く、男

子生徒の姉である岸本香苗と、悪魔と呼ばれた菅原拓、

二人の視点が交互に入れ替わり、進んでいく。

　この話の中では、「人間力テスト」と呼ばれている制度

がある。人間力テストは、生徒同士で互いの性格を採点

するというもの。つまり、元々互いを評価し、個人の中で

良い悪いを決めていたのが、全体の中で、自分の評価が

数字として明確に表されるようになったということであ

る。

　話の中でも言われているが、人は他人の評価から逃げ

られない。そこに私は共感した。学校での成績、高校受

験での試験、高校に進学すればクラス内での順位、社会

に出れば社内評価など。中学生として生活している今も、

人から評価され、その評価を気にしながら、また自分自

身も人を評価している。私も含めて人は、無意識のうち

に人を評価し、人からの評価を何となく知り、態度に出

してしまう。

　人間力テストは、いじめの一つの要因として深く関わっ

ているが、原因はそれだけではない。いじめは、自分自身

の気持ちを満たしたい、不満やストレスを他の人にぶつ

けて解消したい、という精神的な原因、家族との関わり

方や学校内での風潮といった環境的な原因の二つに分け

られるのではないかと思われる。

　常に誰かが自分のことを評価している、今自分がいる

環境が辛いなどといった状況に立たされている人は多い

だろう。このような中で、いじめをなくすことはとても厳

しいことだと考える。だから私たちはなくすではなくそ

の人の抱えている辛い気持ちを軽くする、いじめを減ら

すことをめざして、いじめに苦しんでいる人をサポートす

べきだと思う。

　「人をいじめることは間違っている」と分かっていても

周りに流され、いじめに加担してしまったり、嫌だとはっ

きり言えないという気持ちは理解できる。だからと言っ

て、いじめが目の前で起こっているのに、見て見ぬふりを

することは決して許されない。行動に移すことができな

いとしても、心の底で「これは良くないこと、おかしいこ

とだ」と思ってほしい。そして、自分にできることが何か

ないだろうかと考えてほしい。

　他人の評価や個人の感情に左右され、その人をいじめ

の対象にすることはあってはならない。人の一面だけを見

て相手を知ったつもりになるのではなく、相手を理解し

ようとする気持ちを大切にすることを考えさせられる本

だった。

「ただ、それだけでよかったんです」

著　松村　涼哉

KADOKAWA

講　評

審査委員長　池上　英明

（大阪教育大学）

　今年度より審査委員長を務めることとなりました大

阪教育大学の池上でございます。

　どうかよろしくお願いいたします。

　さて、「第43回人権啓発詩・読書感想文」には、大阪

府内から１，０５２点の応募がありました。内訳は詩部

門７５０点、読書感想部門３０２点です。

　多くの皆さんが応募して下さったことに感謝しますと

ともに、30人の方の入選をお祝い申し上げます。

　審査では詩と読書感想文の部門ごとに、小学校（小学

部）低学年・高学年、中学校（中学部）に分けて、「人権

啓発に資するものとなっているか」「人権に対する深い認

識があるか」などを基準に、子どもたちの心情や背景に

想いを馳せながら意見交換を行いました。

　講評にうつります。まず、人の尊厳、ジェンダー、障が

い者、性的マイノリティ、高齢者、子ども、（職業）差別の

問題、平和と人権等、人権に関わるテーマを幅広く取り

上げた作品がありました。審査では、これらの課題を自

分事としてとらえている作品には、読む者を惹き付ける

力があるという意見が多く出ました。「ジェンダーを巡

る課題にふれつつ、自分の経験をふまえた意見が述べら

れていた。読む人によっていろんな考え方ができる作品だ

と思う」「自分の心の内を素直に表現した作品で心打た

れた」などです。

　また、私たちのくらしの中にある「ふつう」という感覚

を問い直す作品もあり、私たち大人も人権課題を前に

した時に考えていくべきことだと感じています。

　一方、平和と人権を巡る厳しい状況を踏まえ、子ども

たちからの鋭い問題提起もありましたが、そのうえで

「自分はどうするのかという内面の問いかけを言語化で

きればさらに心に迫る作品になる」という意見もありま

した。

　おわりに申し添えておきたいことがあります。それは

選外となった作品からも学ぶべきものがたくさんあった

ということです。

　「この発想はどこからきているのだろう？とても印象

深い作品だった」「読んでいてリズム感がある」などの意

見がありました。

　作品を応募して下さった方にはこれでくじけることな

く、来年も応募していただきたいと思います。また、低

学年の応募作品が少ないようなので、多くの作品を見て

みたいと思っております。どうかよろしくお願いいたしま

す。

　最後になりますが保護者の方々をはじめ教職員の方々

には、これまでご指導、ご支援くださり本当にありがと

うございました。この作品集が大阪府内の各学校等にお

いて活用され、子どもたちの人権感覚の醸成に寄与でき

れば幸いです。